17日　月曜

ローマ

11:1 すると、神はご自分の民を退けてしまわれたのですか。絶対にそんなことはありません。この私もイスラエル人で、アブラハムの子孫に属し、ベニヤミン族の出身です。
11:2 神は、あらかじめ知っておられたご自分の民を退けてしまわれたのではありません。それともあなたがたは、聖書がエリヤに関する個所で言っていることを、知らないのですか。彼はイスラエルを神に訴えてこう言いました。
11:3 「主よ。彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇をこわし、私だけが残されました。彼らはいま私のいのちを取ろうとしています。」
11:4 ところが彼に対して何とお答えになりましたか。「バアルにひざをかがめていない男子七千人が、わたしのために残してある。」
11:5 それと同じように、今も、恵みの選びによって残された者がいます。
11:6 もし恵みによるのであれば、もはや行ないによるのではありません。もしそうでなかったら、恵みが恵みでなくなります。
11:7 では、どうなるのでしょう。イスラエルは追い求めていたものを獲得できませんでした。選ばれた者は獲得しましたが、他の者は、かたくなにされたのです。
11:8 こう書かれているとおりです。「神は、彼らに鈍い心と見えない目と聞こえない耳を与えられた。今日に至るまで。」
11:9 ダビデもこう言います。「彼らの食卓は、彼らにとってわなとなり、網となり、つまずきとなり、報いとなれ。
11:10 その目はくらんで見えなくなり、その背はいつまでもかがんでおれ。」
11:11 では、尋ねましょう。彼らがつまずいたのは倒れるためなのでしょうか。絶対にそんなことはありません。かえって、彼らの違反によって、救いが異邦人に及んだのです。それは、イスラエルにねたみを起こさせるためです。
11:12 もし彼らの違反が世界の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのなら、彼らの完成は、それ以上の、どんなにかすばらしいものを、もたらすことでしょう。

イスラエル人の多くは信仰による救いを受け入れませんでした。イエス様を十字架に付け、キリスト者たちを迫害しました。パウロは「神はご自分の民（イスラエル）を退けてしまわれたのですか。」と問いかけますが、その結論は「絶対にそんことはありません。」ということです。

イスラエル全部が主イエスへの信仰による救いを拒絶したかというと、そうではなく「今も、恵の喜びによって残された者が」いるということです。イスラエルには救いの希望があるのです。今は救いが異邦人に及んでいますが、それは「イスラエルにねたみを起こさせるため」だというのです。律法による救いを頑なに固辞し、選民意識で他国を圧倒しようとするイスラエル民族も、救われている異邦人を見て、羨ましさやさらにはねたみまで感じて、心が変えられていくということです。

確かに現在のイスラエル宣教はそのような方法によるようです。救いの教理や説得によるのではなく、異邦人の信仰と愛を見せることによって、宣教がある程度まで進んでいます。

それは日本人に対しても同じです。異教の風習に染まった地域を、説得ではなく信仰の愛を見せることで、宣教が進むのです。心が開かれていない人や社会では、それが主の御心と言えるでしょう。私たちもそれを実践しましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？